

日本古建築研究の葉 (第三十二回)

天 沼 俊 一

第三十四 窓(中の上)

(ロ) 花頭窓

花頭窓は古いの程形よく、新しくなるに連れて漸く拙くなるといふことを、第十四卷第一號にかいたが(第百頁下段)、本號以下三回に渡り、其窓に就きて大體の變遷を考究してみやうと思ふ。

花頭窓といふのは如何なる形をしたものかといふに、これは上樞が直線即ち楣をなさずして、恰も格狭間の上部のやうな曲線をもつてゐるものといふのである。といつても格狭間を知らねば判ら

ぬから、もつと他の言ひ現はし方をすれば、これはサラセン建築の窓又は拱の様なものとするか、又は多葉拱(Multifoil arch)——建築學會の語彙編纂委員會では多瓣迫持といふ譯語をきめたのであるが、私案として多葉拱の字を用ひておく、敢て諸先生先輩各位にたてをつく次第ではない、この方が簡單だと思ふからである——型のものするよりはかあるまい。これ等のうち、どれも判断がつかなければ圖を一見せられ度い、然らば文句なしに直に了解できる筈である。

『建築字彙』には狹間火燈(甲)及び隅切洞火燈

(乙)の二圖を掲げ(圖を略す。(甲)・(乙)は便宜私につけたもの)

かどー(火燈) 架燈トモマタ瓦燈トモイフ。上

方ガ曲線形ナルモノヲイフソレヨリ火燈窓若ハ

火燈口ヲモ略稱ス甲圖ハ其一例ナリ又乙圖ハ直

線ヨリ成ル窓ニシテ原意ヲ逸シタル變形ナレド

モ上方弓形ニ近キ故ヘ火燈ノ一種ナリト認メテ

隅切洞火燈ト稱ス、洞火燈ハ上方弓形若ハ半圓

形ニシテ木ノ縁ナク壁ノ塗廻シナルモノナリ、

其他上方ノ形ニヨリ蕨火燈、富士火燈、瑟締花

燈(瑟柱さかい  
たのもある)等ノ名稱アリ……

とあつて、夫れからあとは『かどー』ナル語原に

就テ數説アリ」として、其説を紹介してある。『和

漢三才圖會』には尖拱の如き圖を掲げ「圭窓」とい

ふ字をあて、

閨ハ音規 宮中門小者曰閨上圓下方如圭故曰閨門禮

記儒行注云圭窓門旁小戸穿牆爲之上銳下方而如

圭故名又名圭窓豆音

按俗云瓦燈口戸是乎瓦燈即瓦器上銳下廣以納燈

燭以其形故名之今茶道之圍室說小戸多瓦燈口也

……

といふ説明をした次に、窓の圖に連子窓と花頭窓

との圖を掲げてゐる。

以上紹介した様にいろいろの文字があつたり、

また説があつたりする様であるが、私は平素から

用ひてゐる「花頭」なる字をここでも用ひておくこ

とにしたが、これは私が考へだしたのではなく、

何かでいつかみて、一番適當だと思つたからであ

る。頭が花の如しといふところで、これにきめた

のである。

扱てこの様な形の窓は、いつ頃から日本にある

かといふと、鎌倉時代からで、而もそれは我國で

發明されたものではなく、唐様建築について支那

からきたものらしい。或は天竺様建築にもあつた

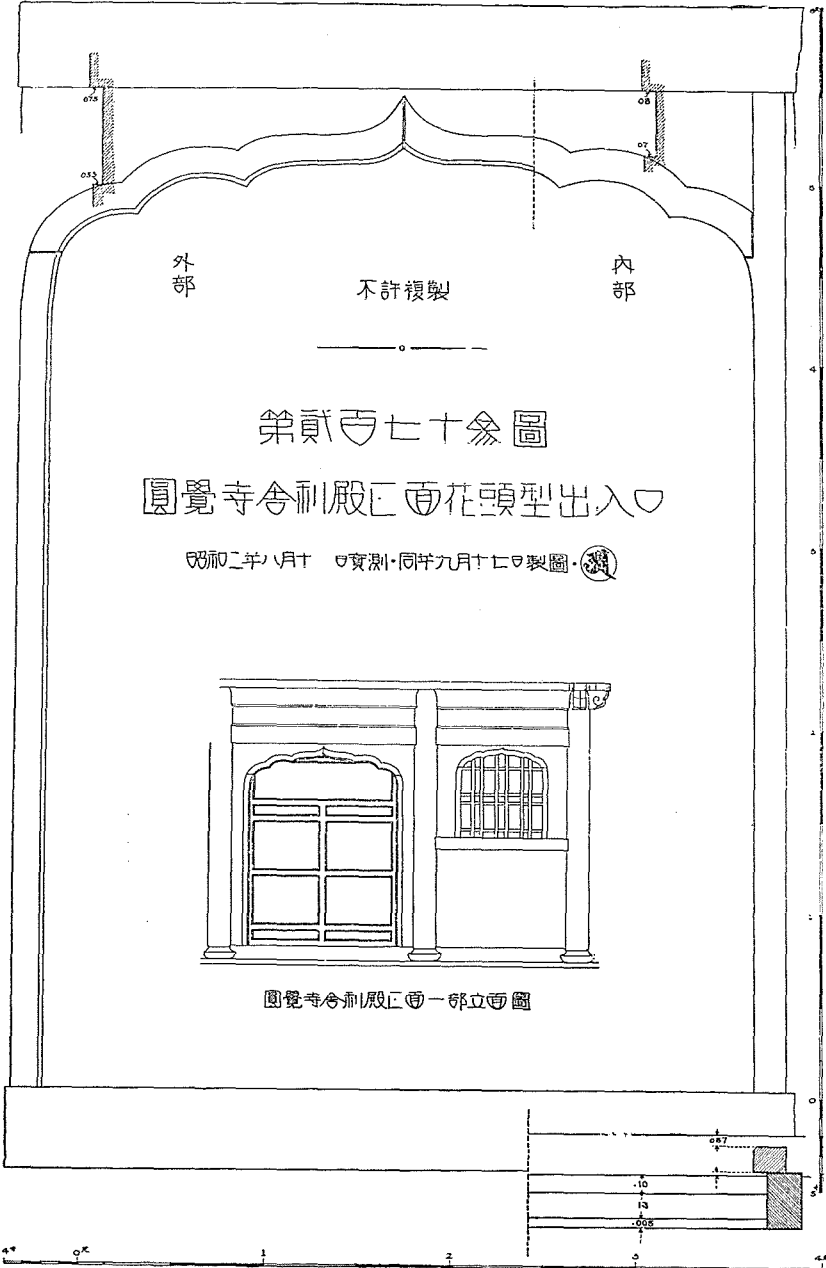
かも知れぬが、これは判らない。唐様の實例は澤山あるが、天竺様のは其様式の建築が少ないからかも知れぬが、この種の窓のついたのはない。幡摩の淨土寺本堂の側面についてはあるが、あれは本堂其物が既に鎌倉ではないし、花頭も亦あといれで問題にはならない。

現にこの種の窓は支那ではいくらかも用ひてゐるが、古いのは石塔の一部についてゐる位で、木造のものでは見當らぬ様である。木造ののだといつてもよく引合にだす『大宋諸山圖』にてゐる昔しの天童山の建物についてゐるのが古いものと思はれる位である。繪に残つてゐるだけであるがこれなどは確かであらう。

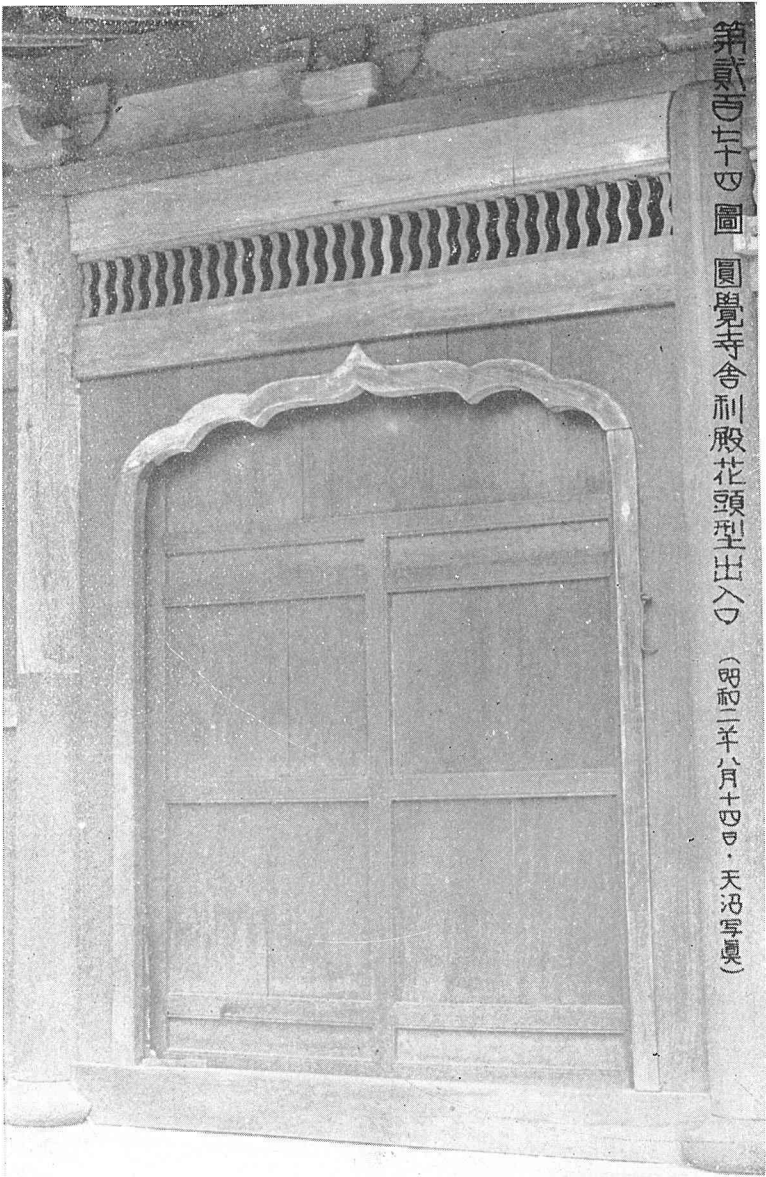
然らば支那にはいつ頃からあつたかといふも、私はまだ知らない。併しこれも亦支那の新案ではなくして、恐らくサラセン建築が本家であらうと思はれる。回教が入れば其建築様式も亦入るのは當

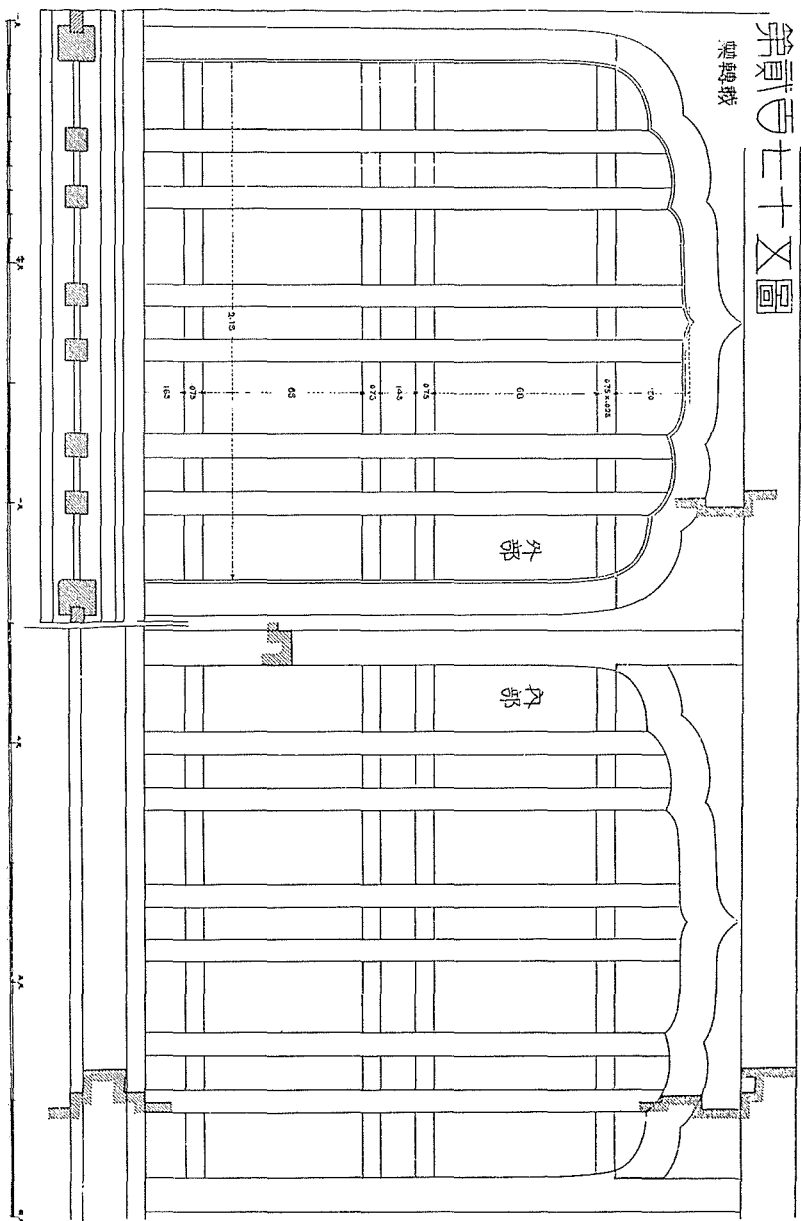
然であらう。支那の清真寺ではいろいろの方法でモスクの様式を摸し、中には隅弓 (Pendentive) の鐘乳飾 (Salaette work) を知らぬために、煉瓦を三角形に積みだしてそこをうまくおさめてゐたり、アラビア文字をくづしたやうな狭間飾を花頭窓に入れたりしてゐる手際をみると、昔しだつて花頭窓を成るべく原の形に似る様にして用ひたといふことは想像ができるのである。

石の建築を同じ材料で摸するなら論はないが、石の建築を木でやつたらどうかといふと、眞を傳へることのできぬ點ができてくるのは勿論のことである。花頭の場合もさうで、木造建築に應用したから、「茨」も石程尖らせることはできず、くり込みもさう圓弧の様に小さい半径をもたせることもできず、總てが自然鈍くなつて了つたやうである。今日支那では新しい建築の窓や拱等を飾漆喰で仕上る場合に、これ等の「茨」が單に痕跡の様に



第貳百七十四圖 圓覺寺舍利殿花頭型出入口  
(昭和二年八月十四日・天沼写真)





外廊

外廊

外廊

外廊

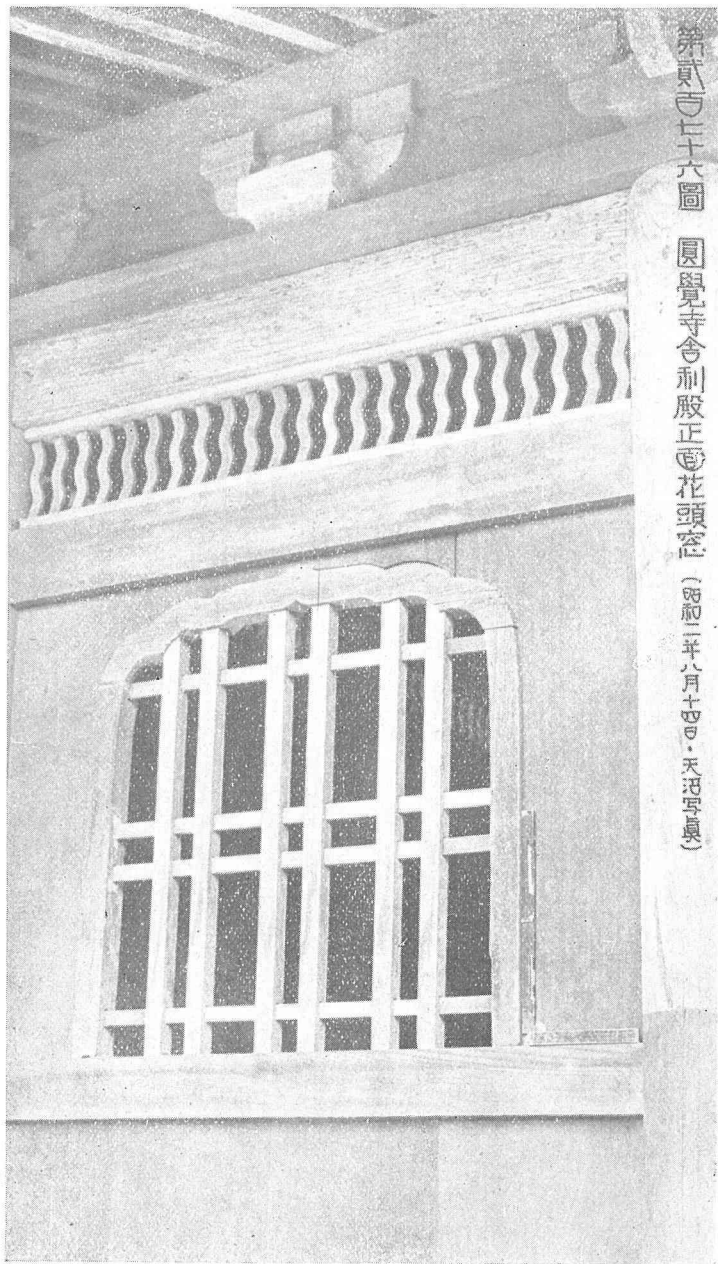
圓覺寺舍利殿正面之廊柱頭立圖  
昭和二年八月十日實測  
九月十日製圖

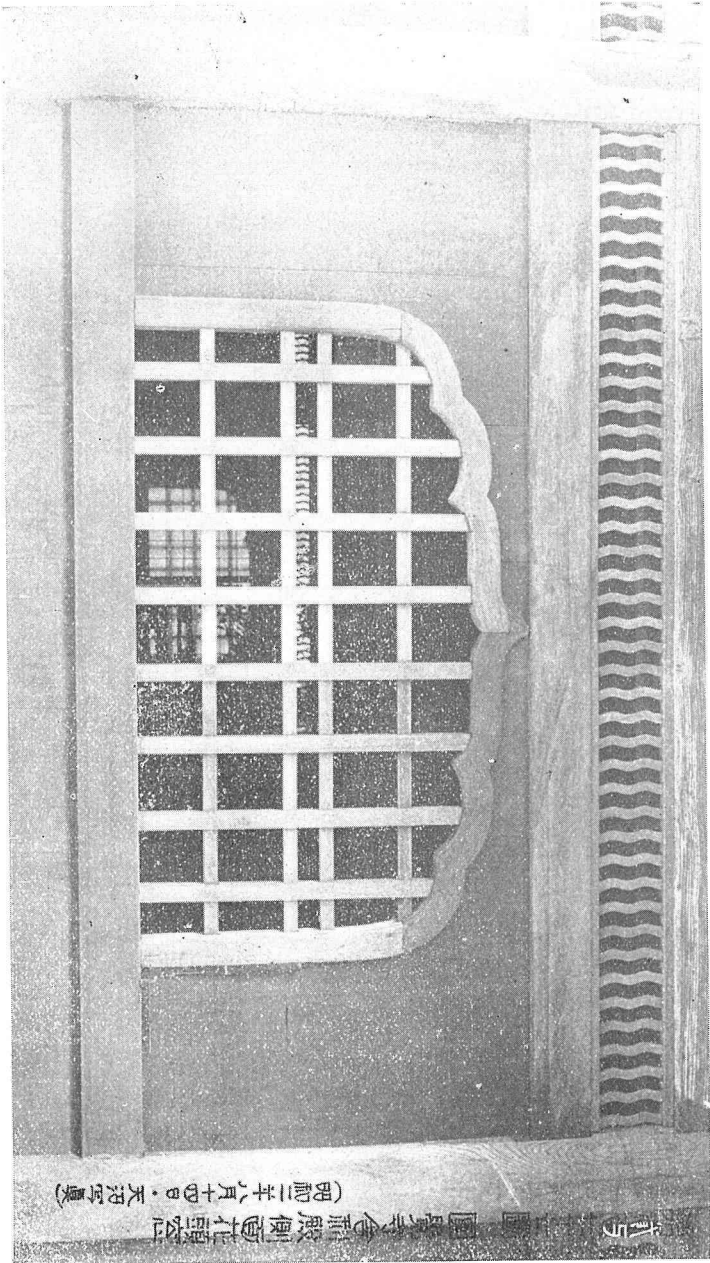


第貳百七十六圖

圓覺寺舍利殿正心花頭窓

(昭和二年八月十四日・天沼写真)

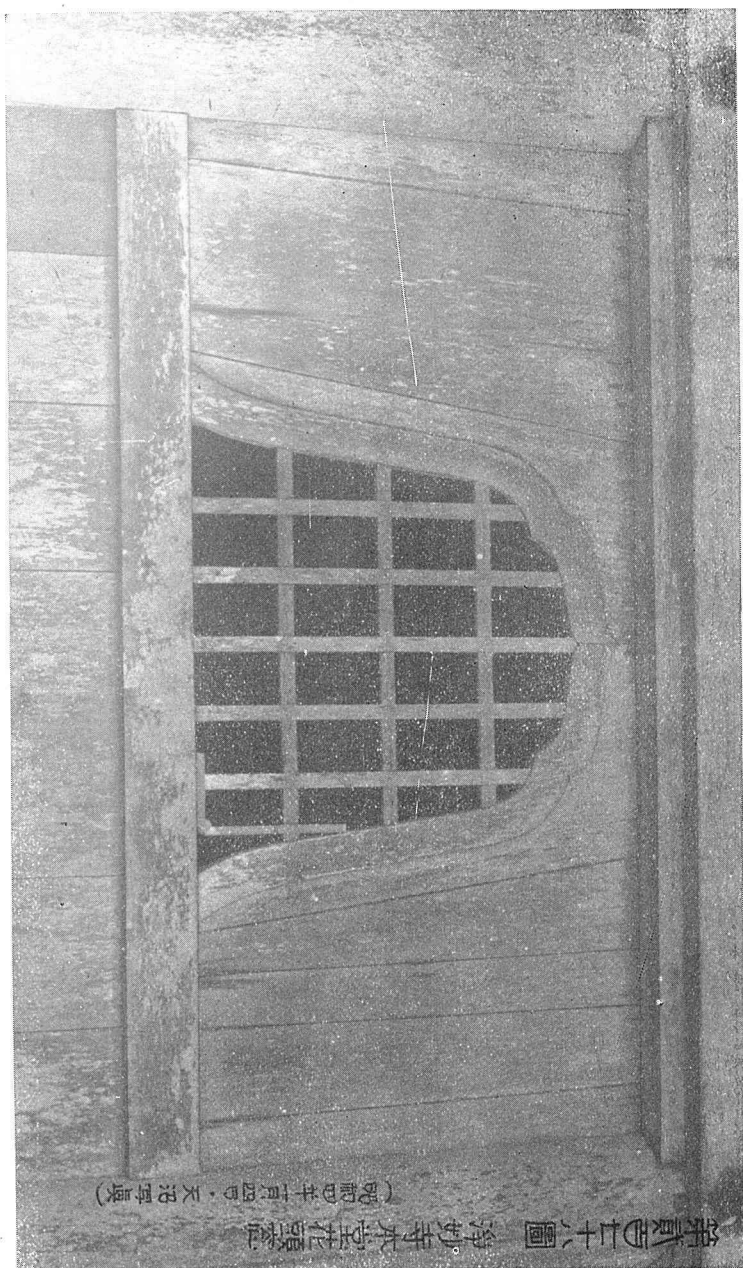




(昭和二十八年七月十日・天沼宮重)

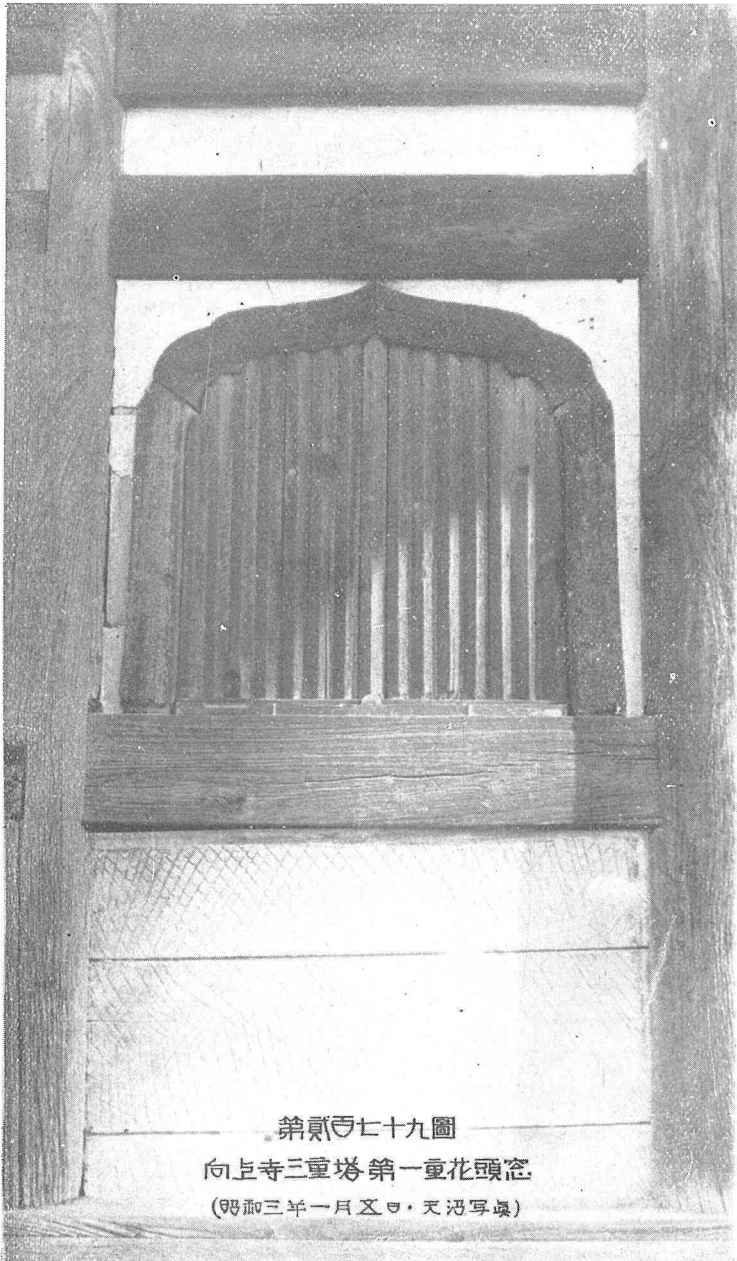
日本古建築研究の葉(三十二)





築威園上六圖 淨妙寺本堂花窗

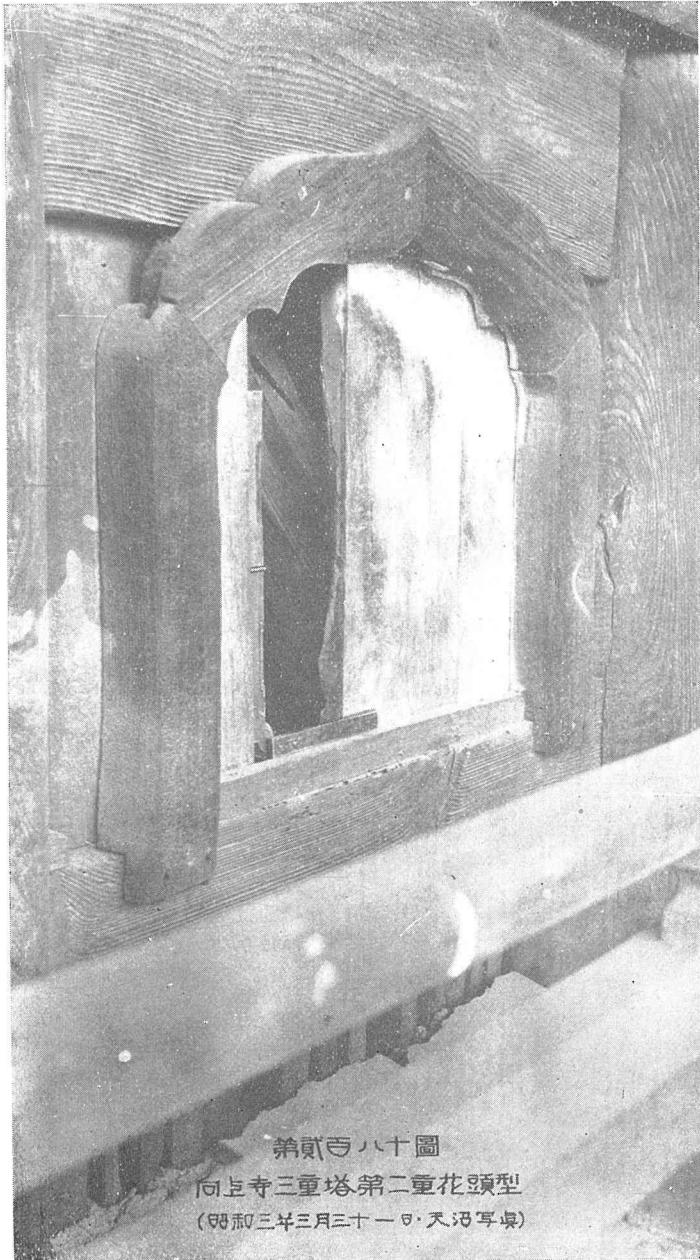
(昭和四年十月、天沼野史)



第貳百七十九圖

向土寺三重塔第一重花頭窓

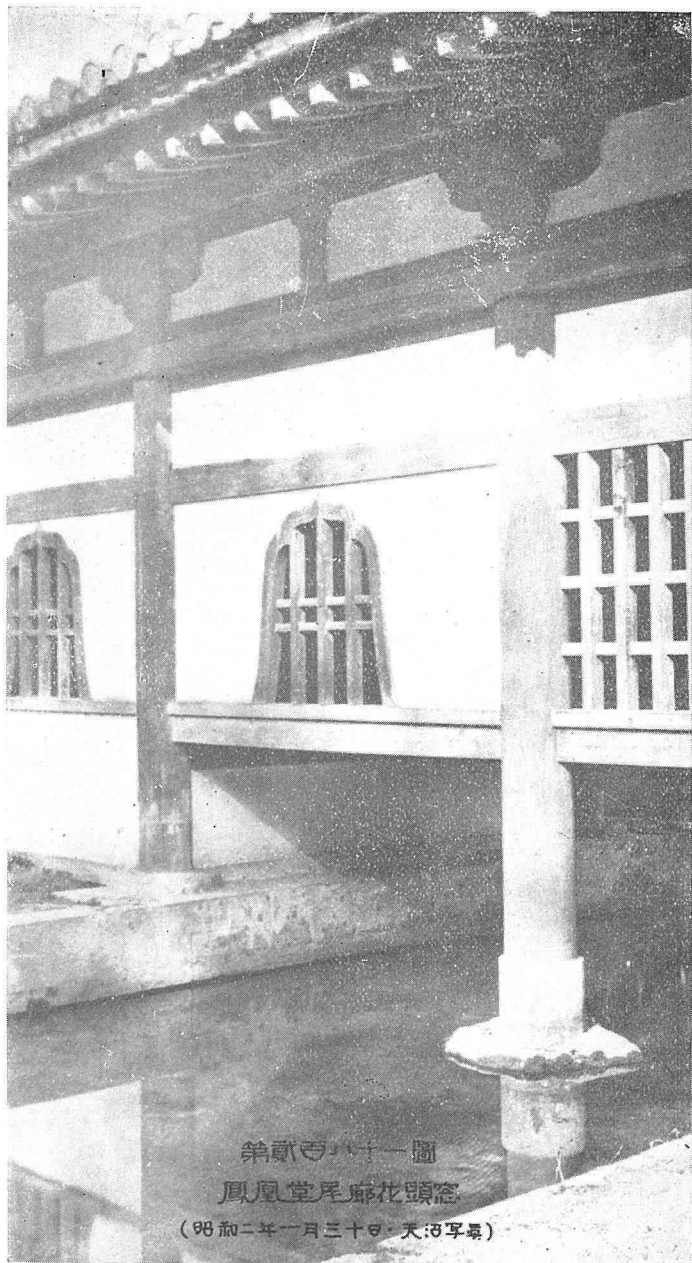
(昭和三年一月五日・天沼写真)



第貳百八十圖

向土寺三重塔第二重花頭型

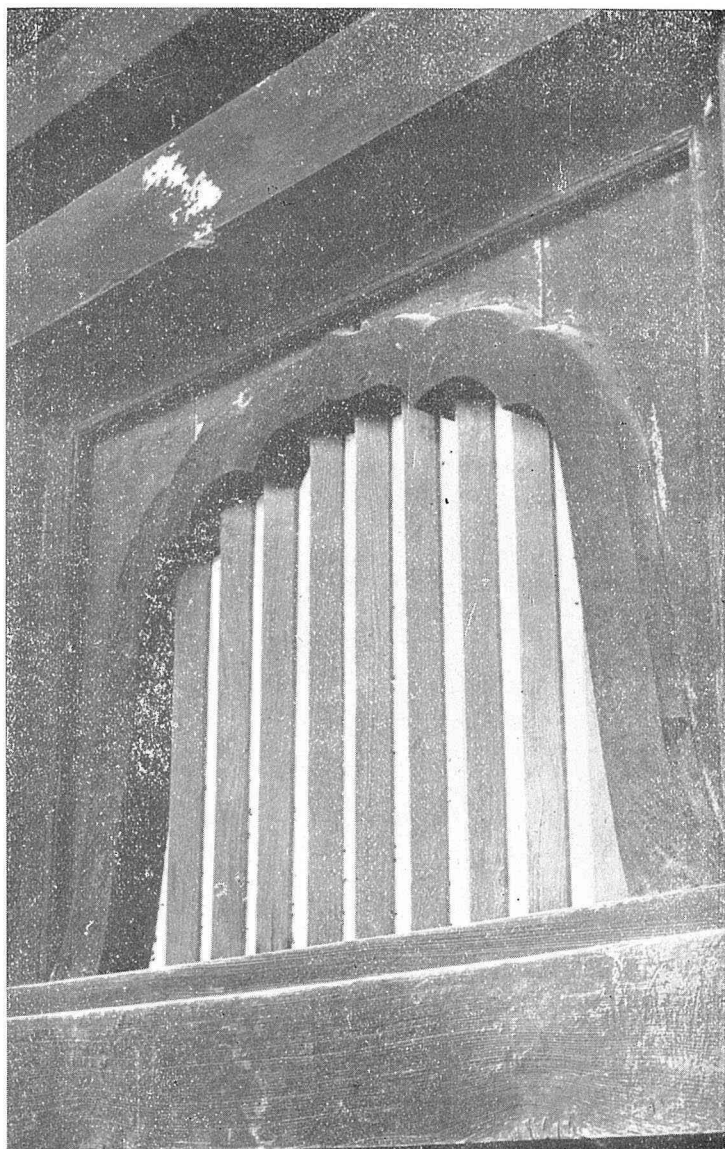
(昭和三年三月三十一日・天沼写真)



第貳百八十一圖

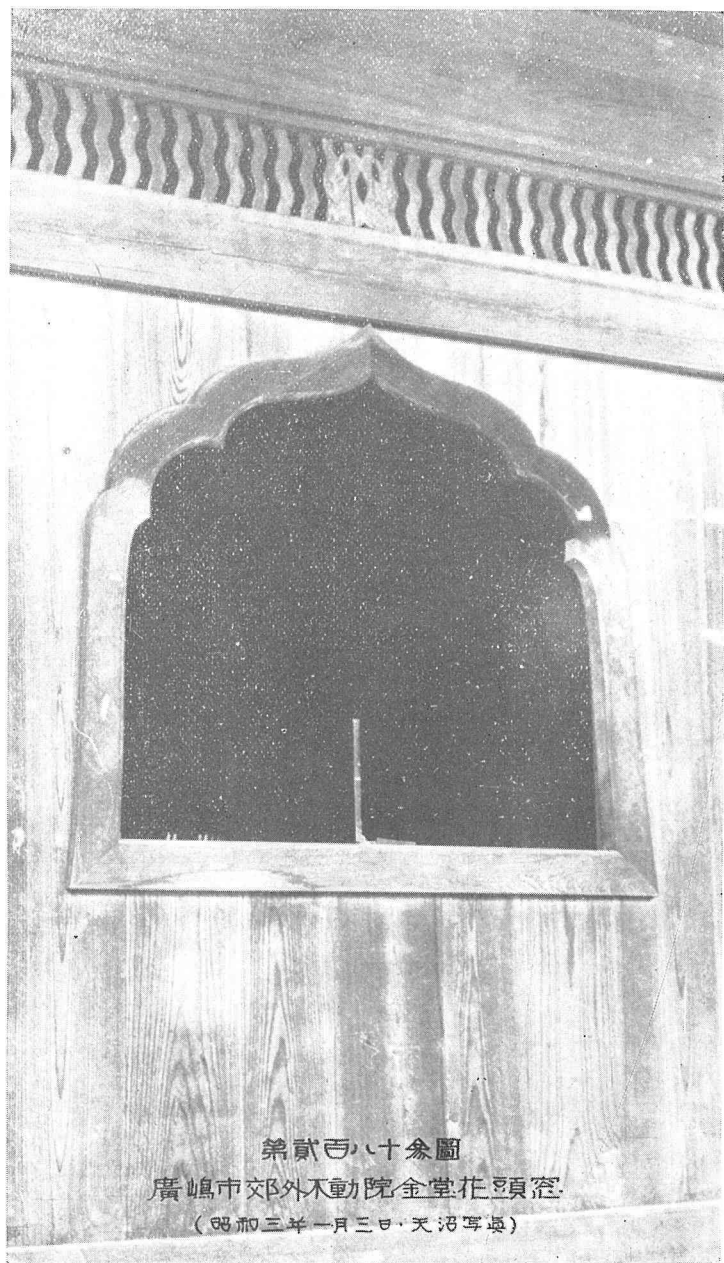
鳳凰堂尾麻花頭窓

(昭和二年一月三十日・天沼享攝)



第貳百八十貳圖 護國院多寶塔初重花頭窓

(昭和四年一月二日・天沼写真)

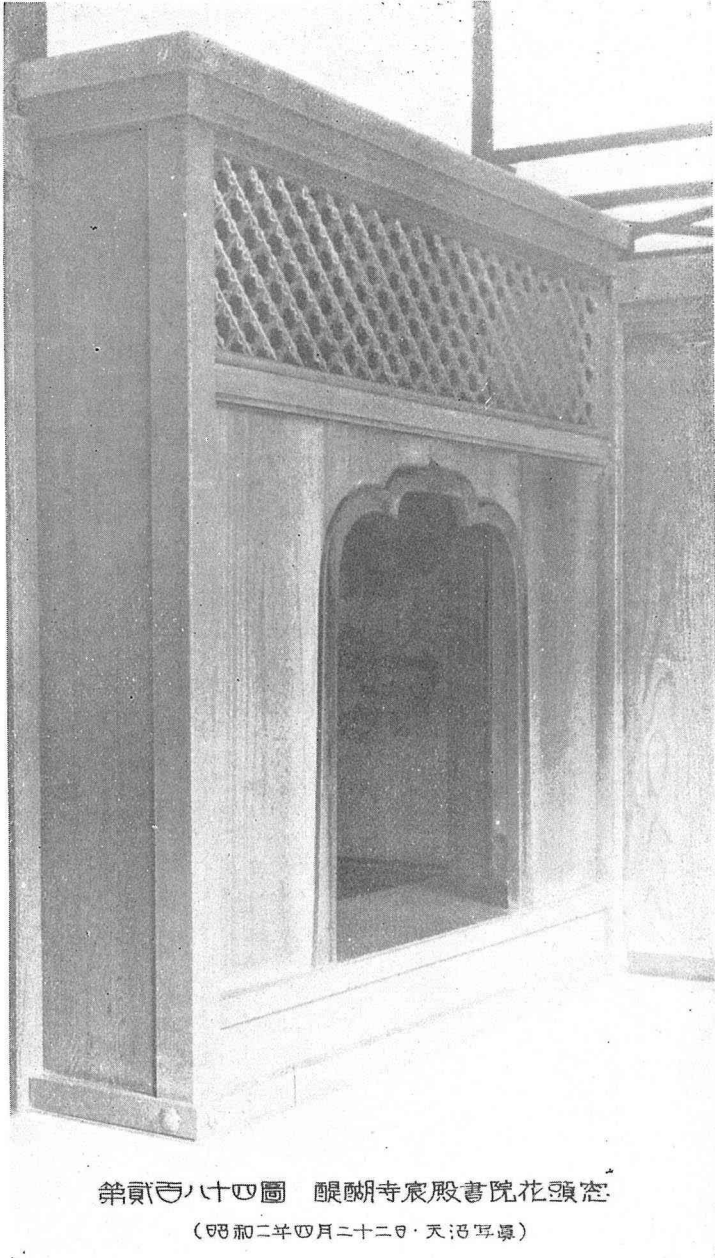


第貳百八十三圖

廣嶋市郊外不動院金堂花頭窓

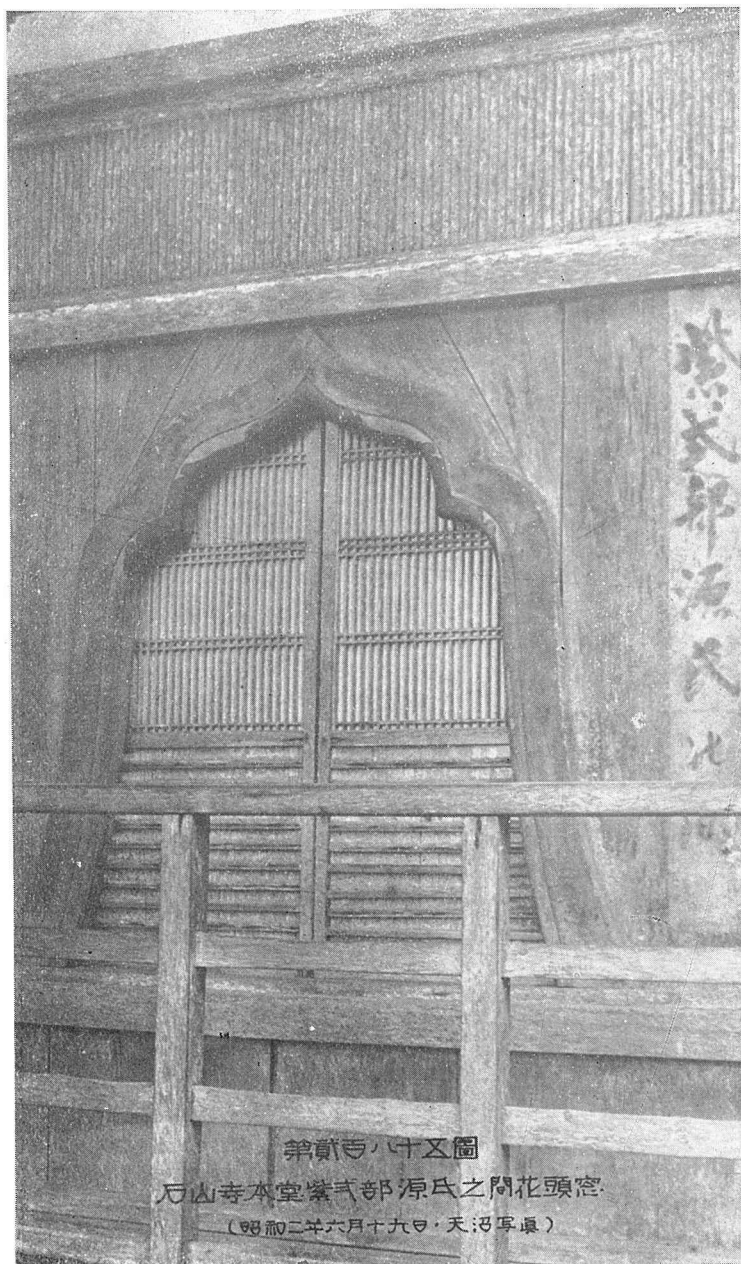
(昭和三年一月三日・天沼写真)





第貳百八十四圖 醍醐寺宸殿書院花頭窓

(昭和二年四月二十二日・天沼写真)

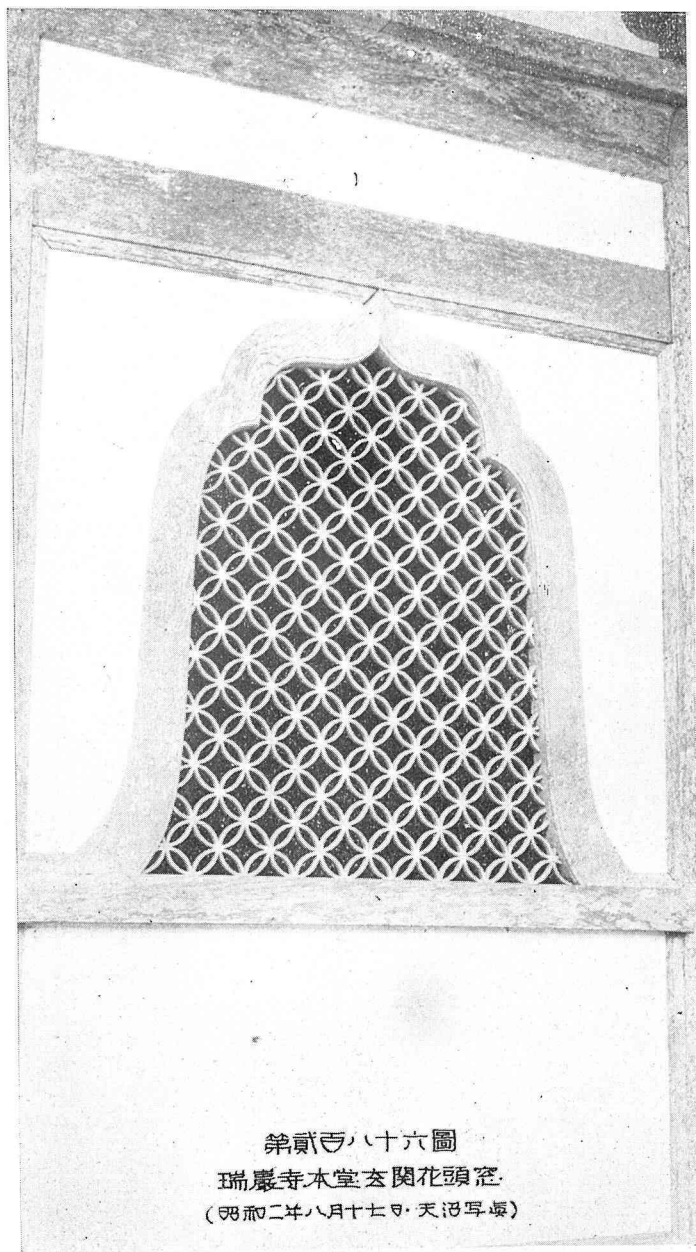


第貳寺、廿五圖

石山寺本堂紫式部源氏之間花頭窓

(昭和二年六月十九日・天沼写真)





第貳百八十六圖

瑞巖寺本堂左関花頭窓

(昭和二年八月十七日・天沼写真)

なつて残つてゐるのをみても、餘程この形がすぎと見える。或はすぎではないが、あんな尖つたところを數所つけねばならぬでも心得て、ただ無意味につけてゐるのかも知れぬ。けれどもあの尖つたものが、茨の痕跡だと思つてみると、中面白いのである。

既に述べたやうに、これは宋の國から傳來した建築の窓であつたが、間もなく木鼻と同じ様に和様建築の窓につかはれ、而も寺院のみではなく、後には神社・邸宅・茶室建築等にも、いろいろ少しづつ型をかへて應用され、また塀だの歩廊だのにも用ひられ、幾多の變形を生じたのである。たから時には名のつけやうのない形もある。その様な變種は誰れにきいても名が知れない。

鎌倉時代

支那で木材を以てこの種の窓をつくり、あちらこちらで用ひてゐたそのまま日本へ輸入されたのであらう。其先づ最古の形は、鎌倉圓覺寺の舍利殿に於いてみることが出来る(第二七三・二七四・二七五・二七六及二七七圖)この建物は正面に花頭型が四所ある。正面中央の間は棧唐戸を吊込んであるが、上は楣で平たい。其兩隣は花頭型の出入口で、片引棧唐戸をたててある(第二七三・二七四圖)。圖でみる様に、其花頭はつき手が中央及其兩脇と都合三所もある、さうしてこの部分は杢目が斜で、肩から下の垂直の部分は之れが従て垂直だから、できたての新しい間は左程目立たなかつたらうが、今の様に古くなつてしまふと、つき目にすぎができたりして甚だ體裁がよくなくなつてくる。木でつくればどうしても、全體を一枚の厚い板からくり抜いてつくる様な非常識なことをせぬ以上、例へどから體裁はまづくなつてもかうするより仕方があるまい。

この出入口の隣りは、これこそほんとうの窓である。其形は第二七五・二七六圖の如く、いま書いた出入口上の形に比べてみると、中央の尖り方が少ないのと、花頭の部分が一木から成り、柰目が水平に通つてゐることと、框の材料が少し太いこととが違つてゐる。其狹間飾は縦横の格子で、縦横とも子が吹寄になつてゐる。さうして縦子は斷面殆んど方形で、横子が四所でこれをつらぬいてゐるのである。

これと殆んど同じでただ幅の少しく廣い窓が同じ建物の側面にある(第二七七圖)。この花頭は正面出入口上のと殆んど同じであるが、格子の縦子が等間隔に配置されてゐるところが正面の窓のと異つてゐる丈けである。

山梨縣東山梨郡後屋敷村大字 屋敷に清白寺といふ寺があり、其佛殿は正慶二年に建立されたものださうで、唐様疎椽檜皮葺方五間の小さな建物

である。正慶二年といへば北條高時誅に伏した年で、建武の前年であることは誰でも知つてゐるであらうが、この建物がいろいろの點で珍らしいものであることは、一般の人は知らないであらう。

この建物に花頭窓が澤山ついてゐる。さうして狹間飾はなく、廣嶋市郊外不動院の様にあけ放しで、其後ろに溝をつくり、兩引板戸又はケンドン蓋の様な板戸を箆めて締りがしてある。この窓の花頭の工合や縦框は、前例に引いた圓覺寺舍利殿のに殆んど全く同じといつていい位である。併しながら材料の都合があつたせいも、小さいものだが花頭のところは中央の尖つたところと兩肩とでついでであること第二七七圖の様である。だから全體が四つの木片からできてゐる。

京都市東福寺禪堂は貞和二年にできたのださうだから、正に南北朝のものである。窓も隨分手が入つてゐるが、古い所が残つてゐるのをみると、

確かに當初から今の様な形であつたといひ得るのである。これも亦縦框が垂直に近い好例である。

然るに同じ時代でも、縦框が後世の如く外方に反つた例もある。和歌山縣有田郡箕嶋町の淨妙寺本堂は、鎌倉時代の建築であるが、其兩側面の花頭窓は當初のものではないかと思はれる。第二七八圖は其寫眞であるが、其框は別につけたのではなくて、板壁からくりだしてあり、其板も上幅狭く下幅の廣い、後世の人では用ひなさうな板を使つてゐる。框全部を板からくりだす——といふか或は寧ろ框をのこして板をくり下げる——様な手間のかかつた仕事は、とても昔しでなければしないだらう、といふのと、もう一つは、上下幅の異つた板を用ひ、其隣りの板も亦、今度は反對に上が廣く下が狭いやうな、そんな變な板もまた昔でなくては用ひまい。もう一つは材料も可なり古い

やうである。といふ三つの點からこの窓を當初のものと思へたのである。さうでなければ、この形は容赦なく室町位へ落して了ふのである。

是に由りて之を觀るに、當代のは以上の乏しい例から次のやうにきめられやうと思ふ。

鎌倉時代の花頭窓——又は出入口——は、多くは縦框が垂直に近いが(圓覺寺舍利殿、東福寺禪堂)、また時には框全部を壁板よりくりだし、さうして其縦框は外方に反つたのもあつた(紀伊淨妙寺本堂)。

室町時代

になると前代のやうに縦が殆んど垂直といふやうなのは見出せない。尤もこの「殆んど」といふのは程度問題であるから、ここに掲げる例でもさういつて言へぬことはない、といへばいへるかも知れない、といふことを斷つておく。

第二七九圖は廣嶋縣豊田郡瀬戸田町の小高い丘の上にてたてる向上寺三重塔初重脇の間のである。

船がだんだん瀬戸田に近づいてくると、海岸に近い丘の上にたつてゐるのがよく見えて、一段の風致を添へてゐる。この塔は唐様の塔婆として有名である様であるが、勿論純粹の唐様ではなく、和様のところも相當に入つてゐるのは、時代が室町(永享十四)だといふ事を考へれば當然といへやう。其初重の窓は圖でみる如く内に盲連子を入れ、輪郭は僅か外方に開き且つ反つてゐる。さうして左右は柱に上下は夫れ夫れ飛貫及び胴貫によりて限られてゐるところの四角な中に入つてゐるのであるから、可なり窮屈で頭をかかめてやつと入つてゐるといふ感がある。これも亦舍利殿の如く框は中央と兩肩とでついである。この窓は單に裝飾で明りとりになつてゐない、即ち盲花頭の一例である

次の第二八〇圖は同塔第二重中の間ので、第三重のもこれと同じ様であるが、これは内部より板をはり、出入はできぬ様に初めから計劃したので

ある。三重塔や五重塔は二重目以上中の間は、大概扉を設けて必要の場合出入ができるやうにしてあるが、この場合にはさう見せただけで、實は板をはつてしまつてゐるから、これもただ飾りについてゐるだけである。これに於いて縦框は、下方胴貫に引きかかり、上方頭貫の面へはみだしてゐるから、初重のからみると遙に餘裕を示してゐる。形式は初重のと同じで、ただ材料が一般に少し太いだけである。

第二八一圖は宇治の鳳凰堂の尾廊のである。鳳凰堂が建つた時代には、未だこの種の窓はなかつたから、創建と同時にこの窓がついてゐたとは思はれない。然らばいつ頃からかといふに、別段確かな證據とてはないが、室町時代につけたのではないかと思ふのである。尾廊が長くて暗いため何とかせねばならぬ事になり、全部を格子にしては大に美觀を害するので、考へた揚句この種の窓を

つけたのであらうが、狭間飾を連子にせずして、太い縦格子を用ひたため、よく調和がとれて見たところ至極工合がよくなつたのである。これ等は古い建築に花頭窓應用の最も成功した一例とするに足りる。

第二八二圖は護國院多寶塔初重脇の間の一例である。護國院といふ寺は澤山あるが、これは和歌山縣海草郡紀三井寺村のもので、こんな本名を名のるよりも紀三井寺といつた方がどの位早く通じるか知れない位である。

多寶塔は本堂に向て右手の高所に西面す。面白いにことに初重の正側背面で窓の様式が異なつてゐる。正面のは花頭で兩側面は框に几帳面の様な面をとつた連子窓、背面はただ切面をとつた框がある丈けで、窓はなく一面の板壁である。切面をとつた最も簡單な框であるだけに、これが一番古いのではないかと思はれる。塔はいつも四方面と

いつて、どの方向からみても同じであるのが普通だのに、これはかういふ工合に窓の種類をかへ、正面を花頭とし背面を窓なしにしてゐる。

そこで今ここで考へてみるのは正面の花頭窓だけである。花頭の輪郭内には九本の斷面が殆んど直角等脚三角形である連子が入れてゐる。輪郭の形も中中よろしく、内の連子もよく調和がとれてゐて、少しもおかしく見えない。

次は廣嶋市郊外、安藝郡牛田村不動院金堂東側のを圖示する(第三八圖)。この建物は天文年間の建築ださうだから、從てこの窓も亦其時のものであらう。正面一間通吹き放し、重層四注、海老虹梁に特徴のある餘程變つた建物である。但し佛壇はもう少し後と思はれるが、其句欄は後に紹介するつもりである。

ここの花頭は狭間飾なしの輪郭丈けで、上は中央の茨が飛貫にぶつかつてゐるが、下は受けるも

のがなく、下框と縦框との出合つたところは「留」になつてゐるから何だか變に見える。此種の窓は下框のない方がよろしい、下は胴貫か何かで見切をつけた方が、多くの例がさうなつてゐるせいか形がいいやうである。とにかくこれは上からぶら下つてゐることも、また下の方からだんだん浮き上つていつて、遂に頭が貫にぶつかり、それきりあがる事ができなくなつて了つたことも、どちらとも思へるやうで、形としては左程でもないが、どうも窓として不満足な取扱様である。

以上の數例により當代のは

前代と大差ないが、脚即ち縦框は開いたののが多くなつた。狭間飾として連子(向上寺三重塔護國院多寶塔)又は格子(鳳凰堂尾廊)を入れ、時に全く缺く(不動院金堂)。

格子の形は前代の繼承、連子は盲のときもあるが、何れにしても當代に始まつたものらしい。としてもよきさうである。要するに鎌倉時代と似

たものである。

桃山時代

になると、これも亦他の細部と同じ様に、いろいろの形を發明し且つ應用の途も廣くなつてきた。以下數例を擧げて説明をしておく。

第二八四圖は醍醐寺三寶院宸殿書院のである。

これなどは花頭窓其物を住宅建築たる書院造の窓に用ひたもので、これは邸宅につかつても少しく不調和な感がないことを實地に證明してゐるのである。こんな場合は大概框丈けが黒漆塗で、他はきぢのままである。これも狭間飾がないが、不動院のと同じく、内側に障子をたてるのである。書院窓のときには、夫れに相當する様な骨の細い柳障子といつたやうなのをたてたのが多い。

第二八五圖は近江の石山寺本堂の前についてゐる紫式部源氏の間と稱する小室の窓である。上方に細かな盲連子をとり、下に腰高障子をはめた花

頭をつけたものである。框は内側に几帳面に近い面をとり、脚も幾分反り過ぎたやうで、形としては大してよくない。紫式部がこの邊で源氏物語をかけた——としても其——時代には、まだ花頭窓は影も形もなかつた筈であるから、其當時のままといふ説明では、少なからず都合がよくない。だからそこは辻褃の合ふ様に、後世改築をしたとか何とかせねば、これからは通用せぬであらう。

第二八六圖は日本三景の一なる松嶋の端巖寺本堂玄關なので、其形は前によく似てゐる。時代が同じだから形まで似てゐるのは當然過る位當然である。但しこの場合には狭間飾として七寶繋が入れてあり、甚だ目先は變つてゐるが、この材料が全部新しい——と思ふが或は見落しがあつて、古い部分が残つてゐたかも知れぬ、若し少しでも當初のものが残つてゐたら訂正せねばならぬが——ために、初めからかうであつたか、或は明治時代

古社寺保存法によつて修理の行はれたときに、この様にしたのか、何れであるか私は知らない。例へ推定復原としても、この形式は古くからあつたので、どちらかといふと極く原始的の文様であるから、桃山にあつても之れは決して珍らしいことも何もない。内部が暗い方だから、圖でみる如く非常にはつきりと浮き上り、大變に美しい。

\* \* \* \* \*

當代の終迄かくときりがいいが、まだ載せたい圖が五枚ばかりあるから、多過ぎはせぬかと思ふので、途中で切ることにしたことを特に斷つておく。(昭和四年八月十九日稿了)